

## 9 江戸中期に書かれた合田強の「西洋医述」を読む

板野 俊文

香川大学

合田強の「紅毛医言」は「解体新書」の発刊に先立つこと12年前(宝暦12年:1762)に書かれた「蘭方内科に及ぶ者としては嚆矢である(新撰洋学年表)」として一部では、知られている<sup>1)</sup>。これは阿蘭陀大通詞の吉雄耕牛とその弟永純の口述を合田強が書き写し、五巻として残した「西洋医述」等を、別に1巻としてまとめたものである<sup>2)</sup>。今回は、合田強の残した講義録の第三巻「西洋医述」<sup>註)</sup>の内容について概説する。これは五巻中で最も図が多く、解剖部分や本草部分を紹介していると同時に、当時の吉雄塾の講義内容を知る上で重要だからである。

第五巻の裏表紙に以下の如く書かれている。

宝暦十二年 壬午 正月二十八日 出故国 二月十四日 来長崎 閏四月二十七日 去長崎 五月十一日 帰故郷 凡 百二十日 為旅客也 崑陵山人

これによって、1762年1月から閏4月まで120日長崎に行き吉雄塾の講義を聞いたことがわかる。さらに第1巻の自序の部分には

かつて聞く紅毛の医たるやただ外科のみありて内科あることなしと 余ひそかにこれを疑うこと数年 今一旦にして氷解す(原文は漢文)。

これより内科がオランダ医学にもあったことがわかったという。

その講義録の内容であるが

- 第一巻 阿蘭陀内治書紅毛医述 熱病(コオロツ)、瘡、腫脹(ヘイドロピークス)、石淋、疝気(コレイキ)、痢(ヂアセンテリア)、狂犬病、梅毒(スパンスポク)、
- 第二巻 紅毛医言 狂(マニア)、卒中風、傷寒(ヘプリス)、小児積気、咳嗽、咯血、宿食、中風(パラレイジス)、疫(ペスラス)、小便閉
- 第三巻 紅毛医言西洋医述 卒倒、癩癧(カンカル)、小児遺尿、
- 第四巻 西洋医述 小産、癩症(メラニコウリア)、閉経、帯下、癩、癩、勞瘵(テイレギ)、痞積(ミルトシュリト)、小児頭瘡、痘、疹(マアゼレン)
- 第五巻 西洋医述 咽頭痛(アンギイナ)、取血、シキウルポイコ

これをまとめて「紅毛医言」とした巻は、序言(永富独嘯庵の序か)、凡例、取血法(腕、下肢、脇、額、眼下)汗法、吐法、下法、熱病の概略と治療法、疫の概略と治療法、種々の薬方からなる。

疾病は以上であるが治療法として諸種薬物の内用を主とし、薬物の効用について述べられたものは多い。特殊の治療法として、吐法、汗法、下法、瀉血法、肛門突薬法、咳嗽、温泉療法、刺絡、カテーテル応用、種痘、兎唇手術法等である。カテーテルは銀製のものを図に示している。

以上より、合田強の文書が臨床医学全般にわたって書かれていることが大きな特徴である。また原語をそのままカタカナ表示をしている。一方「解体新書」が解剖のみであり、原語は音に漢字をあて、読みをつけるという違いがある。この文書の価値であるが、吉雄耕牛がほとんどその出版物を残していないことから、当時の吉雄塾の、または吉雄耕牛の医学知識をしる上で重要である。

1) 大槻如電 新撰洋学年表 P.60, 1972年

2) 富士川游 富士川游著作集 第八巻 温恭合田求吾先生 P.249-260, 1981年

註) 原本は香川県立ミュージアム(香川県高松市玉藻町5-5)、写本は鎌田共済会郷土博物館(香川県坂出市本町1丁目1-24)、香川大学図書館医学部分館(香川県木田郡三木町池戸1750-1)